

伊藤幸雄先生を偲んで

渡 邊 泉

* * *

伊藤幸雄さんとの出会いは、1991年のことだったと記憶している。当時、私は、経営学部長として経営学部に新しく経営情報学科を開設するという重責を負い、当時京都大学の経済学部長をされていた伊東光晴先生の研究室で神戸大学産業経済研究所、後に京都大学経済学部に転籍されたコンピュータのプロフェッショナル定道宏教授をご紹介いただいた。会計学が専攻の私には、経営情報学という新しい研究分野の知識は、ゼロに等しく、まだそれほど一般的ではなかった。そのため、本学が目指す新学科の意義や体系、あるいはカリキュラム等について、彼の研究室や私の研究室で幾度となく議論を交わし、少しずつ、経営情報学科の輪郭を作り上げていった。

何よりも頭を悩ませたのがスタッフの問題である。まだ新しい専攻分野であっただけに、経営情報学、とりわけ本学が志向する社会科学としての位置づけにうまく適合する専門家を迎えることができるのか、これが最大の課題であった。当時は、規制緩和以前の申請であったため、新学科の許認可実務は、極めて厳格で、標準設置経費の計算からカリキュラムの体系や科目設定、とりわけ教員の資格審査については、今日ではとても想像できないほどの厳しさであった。新橋まで新幹線で幾たび往復したことか。今となると、隔世の感しきりである。

そんな中、文部省からの窓口指導を受けて、シンクタンクのアドバイスに従い、必置科目や準必置科目等の関係を睨みながら、「経営科学」と「モデル分析論」を新たにカリキュラム案に加えることにした。問題は、人である。さて、審査に合格するだけの業績のある教員を迎えることができるのか……。定道先生のお弟子さんやお知り合いの方には、残念ながら適任者が見つからず、名古屋市立大学の妙見孟先生にご相談することにした。そこで紹介いただいたのが当時名城大学短期大学商経科の伊藤幸雄教授であった。

* * *

伊藤幸雄さんは、妙見先生の秘蔵子で、定道先生と一緒に妙見先生の研究室で「お見合い」(?)をすることになった。それが伊藤さんとの初めての対面であった。会って少し話をしているうち、私は、すっかり伊藤さんの人柄が気に入ってしまった。「学問は、人格である」と私の指導教官は、いつも言われていた。人の心を打つ論文を書くには、着飾った文章だけではだめで、重要なのは中身である。そのためには、心が豊かでなくてはならない。貧しい心の方が書いた論文は、決して他の人の心を揺り動かすものにはならない。品格のある論文は、品格のある心からしか生まれれないのだと絶えず言われていた。伊

藤さんの言葉や態度の端々にその人柄が滲み出ていた。「この人は、研究者だなあー」と私は、直感した。この判断が決して間違っていなかったことは、経営情報学科がスタートした後になって証明されることになる。

妙見先生の研究室を後にして、伊藤さんが車で名古屋駅まで送ってくれた。夕闇が迫るころだったため、二人して駅ビルで夕食を共にした。彼の専門は、経済統計で、やたらと難しい等式を並べての話になった。彼が今一番関心を持っていることについて、雄弁に話をしてくれた。会計の歴史を専攻している私には、彼の話をも十分に理解することができず、学問の一般的な方法論で応答する術しか持ち合わせていなかった。ただその時の、八丁味噌の田楽の味は、未だに忘れられず、何かの機会で名古屋を訪れて田楽を食するたびに、伊藤さんとのことが懐かしく思い出される。

* * *

伊藤幸雄さんの本学への着任は、経営学部経営情報学科開設（1991年4月）の翌年1992年4月1日のことである。初年度は、「モデル分析論」と「演習」を、翌年は「経営科学」の担当が加わった。以来、20年を超える付き合いになった。彼は、名古屋からの通学であったため、教授会の終わった後で、ゆっくりと杯を交わすことは、あまりなかった。夏休みを利用して、ヨーロッパの学会で報告した時は、いつもお土産を持って研究室を訪ねてくれた。そんな時は、しばらく椅子に座って話し込み、イギリスの話や学問論に花を咲かせた。彼の学位は、サセックス大学の経済学の PhD である。

いつの時代でもまた何処においてもそうであるが、新しいものが参入されると、必ずと言ってよいほど、その異物を排除しようとする力が働く。長く社会科学系統の経済学部と経営学部の2学科のみで運営してきた本学にとって、自然科学的色彩を帯びた経営情報学の参入は、ある意味で、違和感を持って受け止められた。自己の専門領域でしっかりと研究している人は、自信を持って自己主張をすることができる。とはいえ、研究に対して持続した志を持ち続けることがどれほど困難なことかもまた大学人であれば皆十分に承知している。研究を持続させることに疲れてしまうと、心ならずもつい学内行政に目を移してしまう。歌を忘れたカナリアである。肝心の研究を疎かにしている人は、どうしても自らの意見を研究分野で主張することができず、そのはげ口を行政ばかりに向けたがる。そんな人たちにとって、新学科は、経営学部の中においてすら、格好の標的になった。何のために研究者としての道を選んだのであろうか。一体、研究者とは、孤立無援のはずなのに。そんな中で、伊藤さんは、これまでの自らの研究を信じて、自らの信念を外的な圧力によって簡単に曲げてしまうことは、なかった。責任上、初代の経営情報学科長に就任したが、学内の意見調整に腐心していた私をいつも心の奥底で支えてくれたのが伊藤さんであった。きっと、彼の志が研究者として本物であったからであろう。心から信頼できる朋友であった。

* * *

語学が堪能で、海外の学会で幾度となく報告し、1年間の留学もイギリスを選んでい。北浜のサテライト大学院を開設した時も、彼は、これからは、世界に羽ばたく学生を世に

送り出していかなければ大学の社会的責任が果たせない。だから、英語のみの講義も提供するべきではないかと私に助言してくれた。北浜のサテライト大学院の講義に、シュメルザイツ先生の英語によるディベート論を加えたのは、彼のアドバイスが私の心のどこかに残っていたからであろう。

いつの頃だったであろうか。F館のエレベータに乗る急激に痩せた彼の姿に驚いて、研究室を訪ねたことがあった。その時、彼は、「血糖値が少し高いので医者から痩せるように言われて体重を落とすだけです。大丈夫ですから心配しないで下さい」と明るい返事が返ってきた。私も14,5年前、降圧剤を服用していた時があり、薬をやめようと思いかかりつけの医師に相談したところ、体重を落とすようにと言われ、一気に10キロ近く減量したことがあった。きっと彼も同じようなことだと思い、そんなには気にしないでいた。その後、コピー機の前で顔を合わすたびに、「大丈夫？」と声をかけた。今にして思うと、もうその頃から病魔が彼の肉体を蝕み始めていたのであるか。だとすれば、私が掛ける「大丈夫？」という言葉は、彼には大きな心の負担になっていたのかもしれない。今となっては、それが悔やまれる。

* * *

2012年3月15日、闘病生活の結果、研究者伊藤幸雄は、帰らぬ人となった。大阪経済大学は、惜しい人を亡くしてしまった。享年62歳、これからが、本当の意味で社会科学とは何であるのかがわかってくる歳だというのに。余りにも早い死である。残念でならない。残された奥様やお嬢様の口惜しさは、いか程であろうか。ただただ、安らかな眠りをお祈りするばかりである。(合掌)